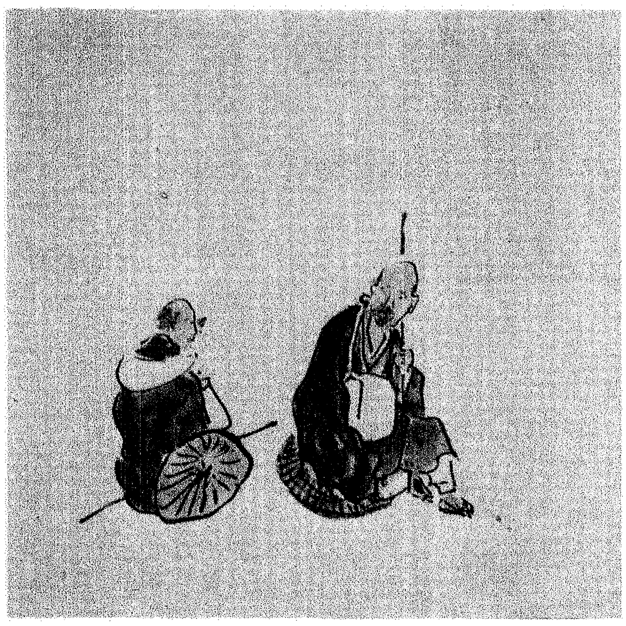
つゝけたり。おもひかけすかゝるところにも来れるかなと、宿からんとすれと、やとかす人なし。漸まとしき小家に一夜をあかして、明れは又しらぬ道まよひ行。袖のわたり・尾ふちの牧・まのゝ萱ハらなと、よそめに見て、遙なる堤を行。心ほそき長沼にそふて、戸伊麻といふ所に一宿して、平泉に至る。其間廿余里ほとゝ覚ゆ。三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡ハ一里こなたに有。秀衡か跡ハ田野に成て、金鶏山のミかたちをのこす。先高舘にのほれは、北上川南部より流るゝ大河也。衣河ハ和泉か城をめくりて、高舘の下にて大河に落入。康衡等か旧跡ハ、衣か関をへたてゝ、南部口をさし固め、夷を防くと見えたり。さても義臣をすくつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河有、城春にして草青みたり」と、笠うち敷て、時のうつるまでなみたを落し侍ぬ。



夏艸や兵ともか夢のあと

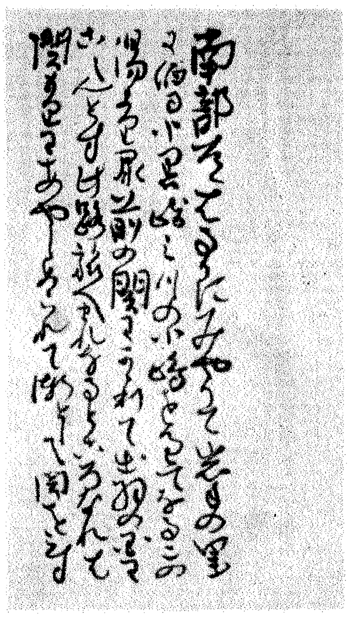
うの花に兼房みゆる白毛かな　曽良

かねて耳おとろかしたる二堂開帳す。経堂ハ三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝ちりうせて珠の扉風にやふれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢となるへきて、四面あらたに囲て、甍を覆て、風雨をしのき、しはらく千歳のかたみとハなれり。

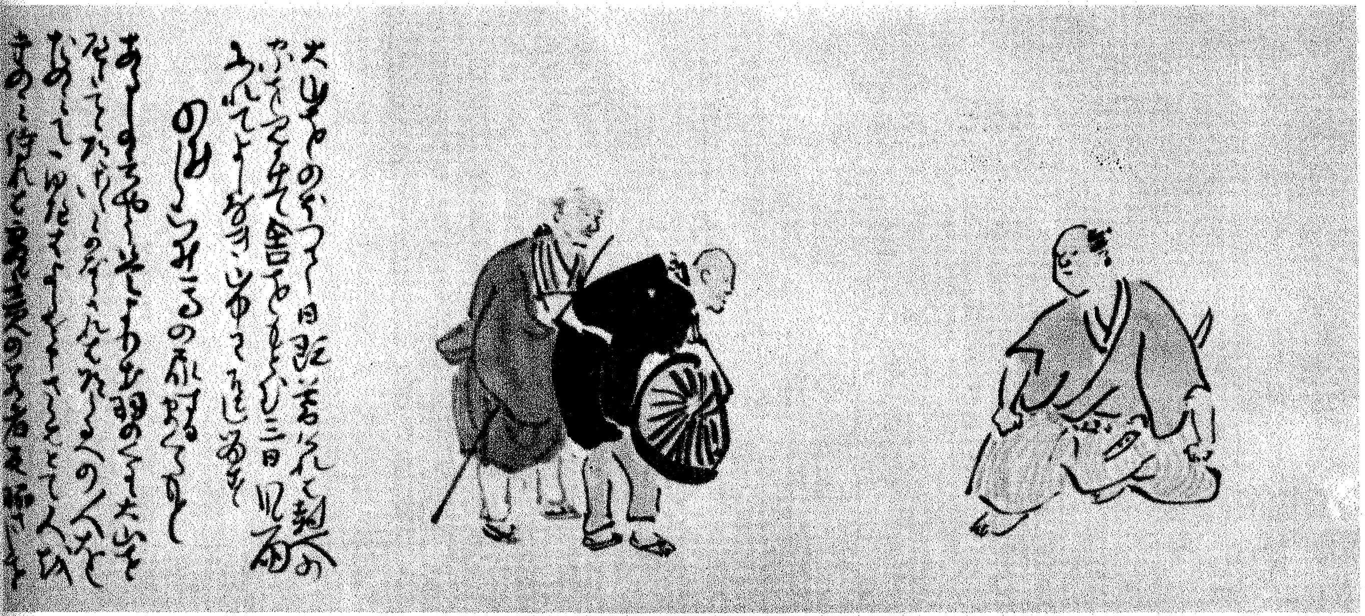
さみたれのふりのこしてや光堂

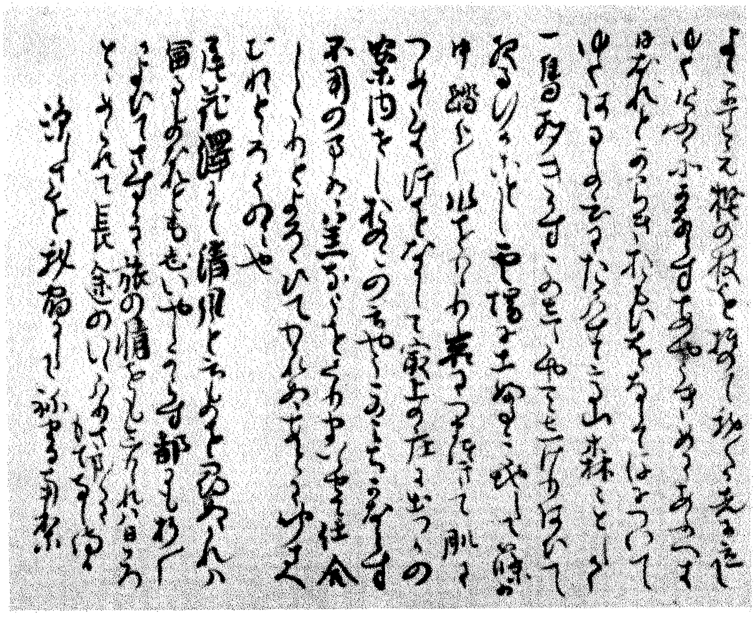
9)
小黒崎 みつの小島の
人ならば 都のつとに
いざと言はましを
（古今集東歌）

〔下巻〕



岩出　南部道はるかにみやりて、9)岩手の里
おぐろざき　に泊る。小黒崎・みつの小嶋を過て、なるこの
美豆の小島　湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に
鳴子の湯　こへんとす。此路、旅人まれなるところなれは、
しとまえ　尿前の関　関もりにあやしめられて、漸（やうやう）として関をこす。





大山をのほつて日既暮けれは、封人（ほうじん）の家を見かけて舎（やどり）をもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

　のみしらみ馬の尿するまくらもと

あるしの云やう、是より出羽のくに、大山（たいざん）をへたて、、道さたかならされは、道しるへの人をたのミてこゆへきよしを申。「さらは」とて、人をたのミ侍れは、究竟（くきやう）の若者、反脇（そりわき）さしをよこたえ、樫（かし）の杖を携（たづさ）て、我々か先に立てゆく。「けふこそかならすあやうきめにあふ（合う）へき日なれ」と、からき（辛）おもひをなして後についてゆく。あるしの云にたかハす、高山森々（かうざんしんしん）として、一鳥（いってふ）声きかす。このしたやミしけり（茂）あひて、夜（よ）る行（ゆく）かことし。雲端に土ふるこゝ地して、篠（しの）の

り杜甫カ「鄭府馬潜曜宴於洞中」

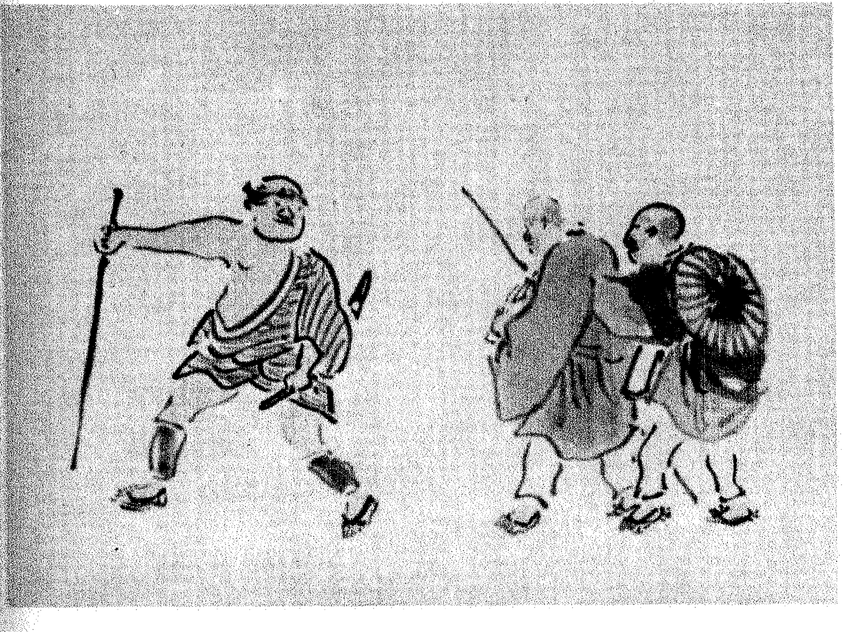
中踏分（ふみわけ）く、水をわたり、岩につまつきて、肌につめたき汗をなかして、最上の庄に出つ。かの案内（あない）せしおのこの云やう、「このミちかならす不用（ふやう）の事有。恙（つつが）なうをくりまいらせて仕合したり」と、よろこひてわかれぬ。あとに聞（きき）て、むねとゝろくのミ也。

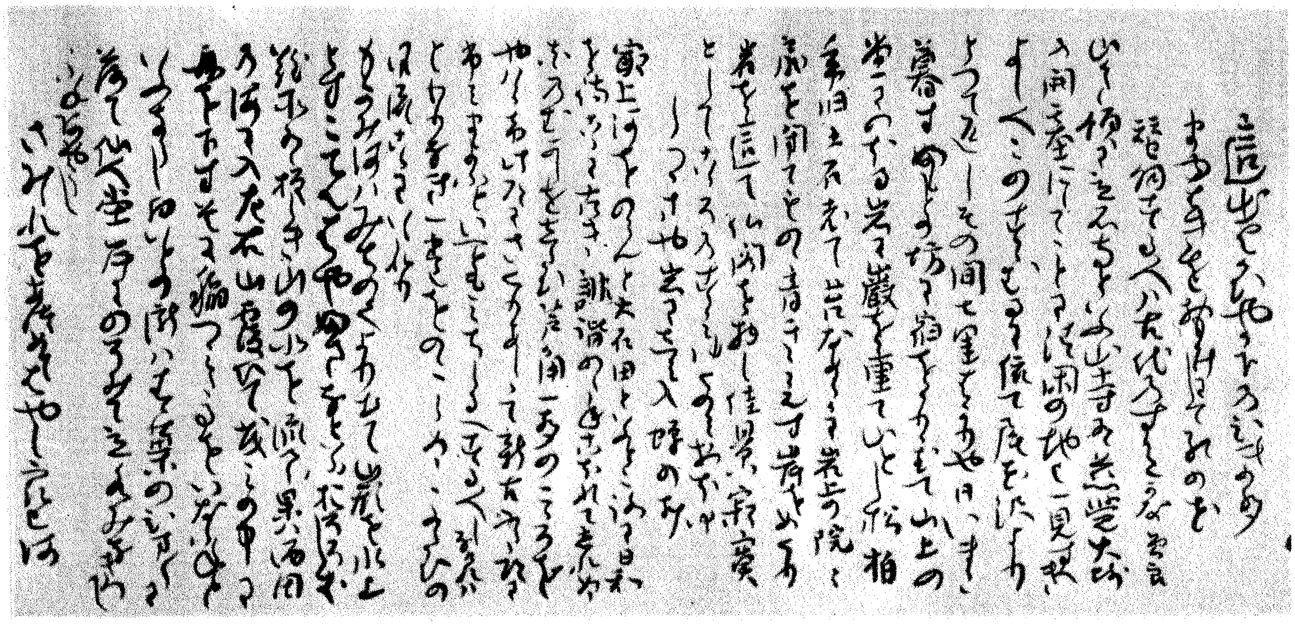
最上

尾花沢

尾花沢（をはなざわ）にて清風と云ものを尋ぬ。かれハ富（とめ）るものなれとも、志いやしからす。都にも折々かよひて、さすかに旅の情（なさけ）をもしりたれハ、日ころとゝめられて、長途のいたハり、さま〲にもてなし侍る。

　涼しさを我宿にしてねまるなり





立石寺（りふしやくじ）

這出よかひやか下のひきの声1)

まゆはきをおもかけにして紅の花

蠶飼する人ハ古代のすかたかな　曽良

山かた領に立石寺といふ山寺有。慈覚大師（じかくだいし）の開基にして、ことに清閑（せいかん）の地也。一見すへきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢よりとつて返し、その間（かん）七里はかり也。日いまた暮す。ふもとの坊に宿をかり置て、山上の堂にのほる。岩に巌を重て山とし、松柏年旧（としふり）、土石（どせき）老て苔なめらかに、岩上の院々（ゐんゐん）扉を閉（とぢ）てものゝ音きこえす。岸をめくり岩を這て仏閣を拝し、佳景寂寞（かけいじやくまく）として、こゝろのすミ（澄）ゆくのミおほゆ。

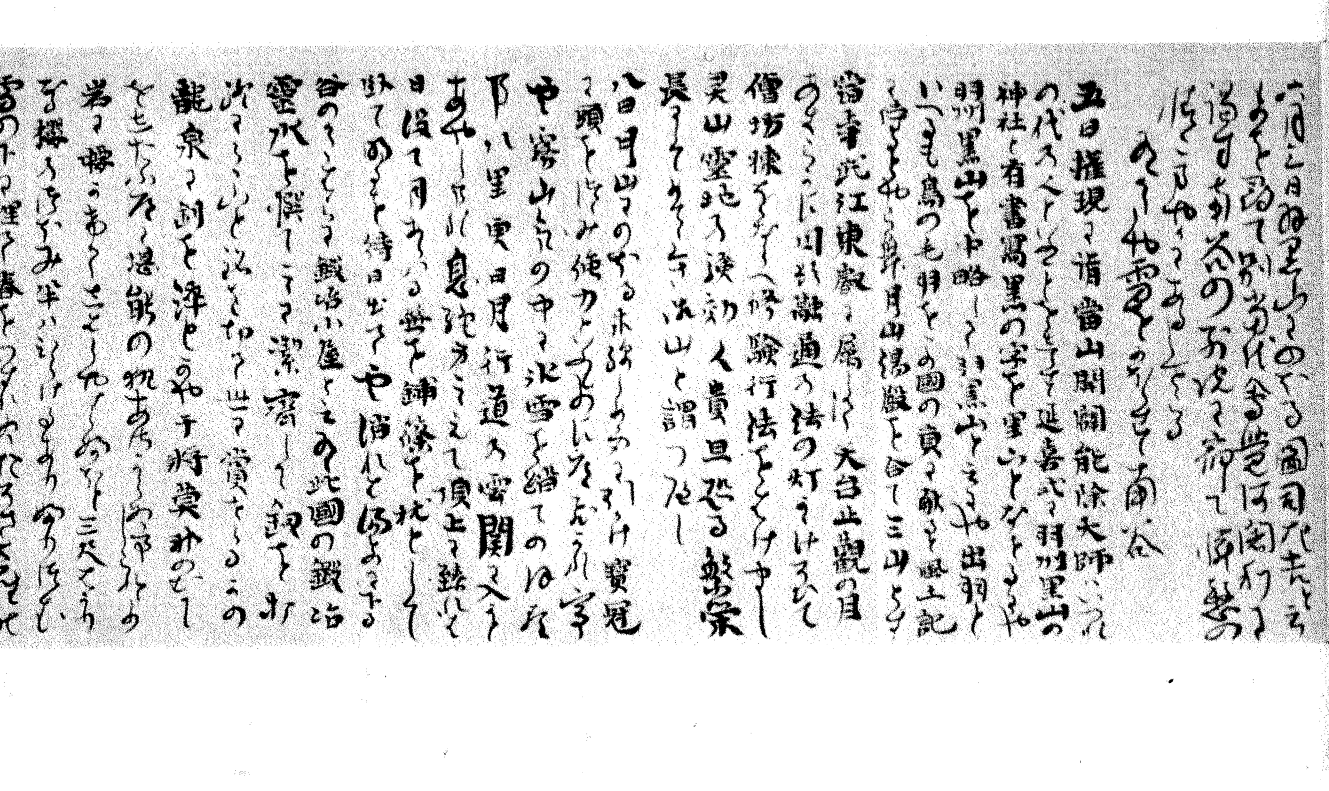
しつかさや岩にしミ入蝉の声

最上川

最上河をのら（乗）んと大石田（おほいしだ）といふところに日和（ひより）を待。こゝに古き誹諧のたねこほれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角（ろかく）一声のこゝろをやハらけ、此道にさくりあし（足）て、新古（しんこ）ふた道にふみまよふといへとも、ミちしるへする人しなけれハと、わりなき一巻（ひとまき）をのこしぬ。このたひの風流こゝにいたれり。

もかみ河ハ、みちのくより出て、山形を水上（みなかみ）とす。こてん（碁点）・はや（隼）ふさなといふおそろしき難所有。板しき（敷）山2)の北を流（ながれ）て、果ハ酒田（さかた）の海に入。左右山覆ひて、茂ミの中に舟を下（くだ）す。是に稲（ね）つミたるをいなふね3)といふならし。白いとの滝4)ハ青葉のひま〳〵に落て、仙人堂＊、岸にのそみて立。水みなきつてふねあやうし。

さみたれをあつめてはやし最上河



---

1) 朝霞鹿火屋（かひや）が下に鳴くかはづ声だに聞かば あれ恋ひめやも　（万葉集巻十）

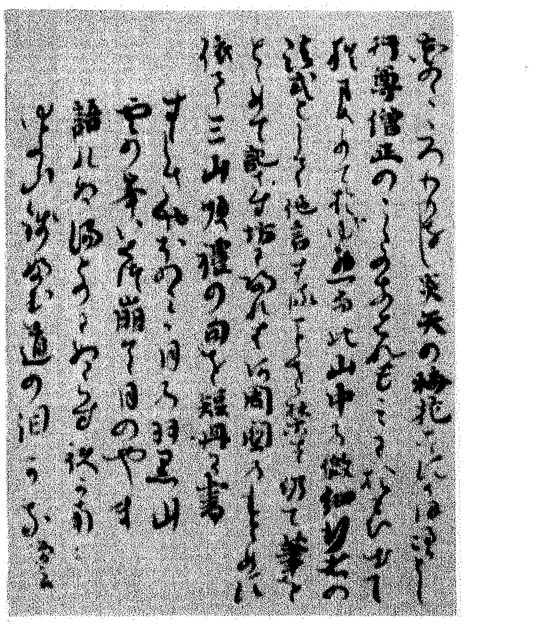
1) 朝霞鹿火屋が下の鳴くかはづしのびつつありと告げむ児もがも　（同巻十六）

＊仙人堂＝義経家臣、常陸坊海尊を祀る
外川（とがわ）神社の別名

2) みちのくに近き出羽の板敷の山に年ふる我ぞわびしき（夫木（ふぼく）和歌抄）

3) 最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり（古今東歌）

4) 最上川瀧の白糸くる人のここによらぬはあらじと思ふ（夫木和歌抄）



出羽三山
羽黒山

（七月十九日）
六月三日、羽黒山にのほる。図司左吉と云
ものを尋て、別当代会覚阿闍利に
謁す。南谷の別院に宿して、憐愍の
情こまやかにあるしせらる。「四日、本坊にをゐて誹諧興行」

有かたや雪をかほらす南谷

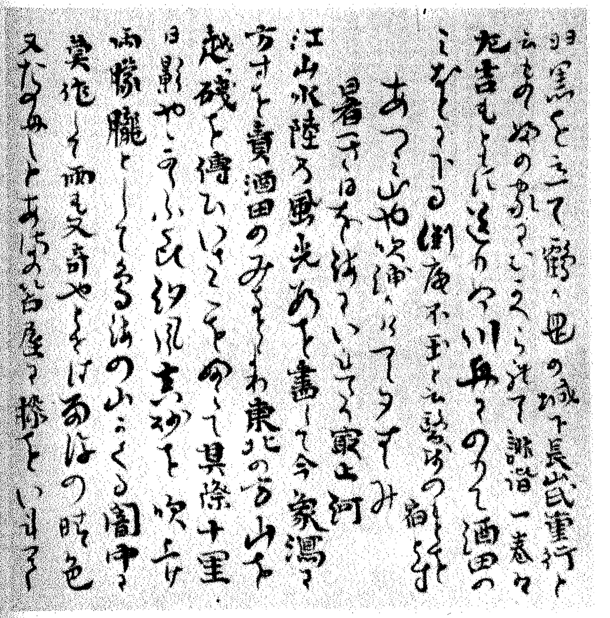
五日、権現に詣。当山開闢能除大師ハ、いつれ
の代の人といふことをしらす。延喜式に、羽州里山
の神社と有。書写、黒の字を里山となせるにや。
羽州黒山を中略して羽黒山と云にや。出羽と
いへるも、鳥の毛羽をこの国の貢に献ると、風土記
に侍るとやらむ。月山・湯殿を合て三山とす。
当寺、武江東叡に属して、天台止観の月
あきらかに、円頓融通の法の灯かゝけそひて、
僧坊棟をならへ、修験行法をはけまし、
霊山霊地の験効、人貴且恐る。繁栄
長にして、めてたき御山と謂つへし。
八日、月山にのほる。木綿しめ身に引かけ、宝冠
に頭をつゝみ、強力といふものに道ひかれて、
雲霧山気の中に氷雪を踏て、のほる
事八里、更日月行道の雲関に入かと
あやしまれ、息絶身こゝえて頂上に臻れは、
日没て月あらハる。笹を鋪、篠を枕として、
臥て明るを待。日出て雲消れは、湯とのに下る。
谷のかたはらに鍛冶小屋と云有。此国の鍛冶、
霊水を撰て、こゝに潔斉して釼を打、
終に月山と銘を切て、世に賞せらる。かの
龍泉に剣を淬とかや[1]。干将・莫耶のむかし
をしたふ。道に堪能の執あさからぬ事しられたり。
岩に腰かけてしはしやすらふほと、三尺はかり
なる桜のつほみ、半ハひらけるあり。ふりつむ
雪の下に埋て、春をわすれぬおそさくらの
花のこゝろわりなし。炎天の梅花こゝにかほる
かことし。行尊僧正のうた[2]のあはれもこゝにおも
ひ出て、猶まさりておほゆ。惣而、此山中の微細、
行者の法式として、他言することを禁す。
仍て筆をとゝめて記さす。坊に帰れは、阿闍闍の
もとめに依て、三山順礼の句を短冊に書。

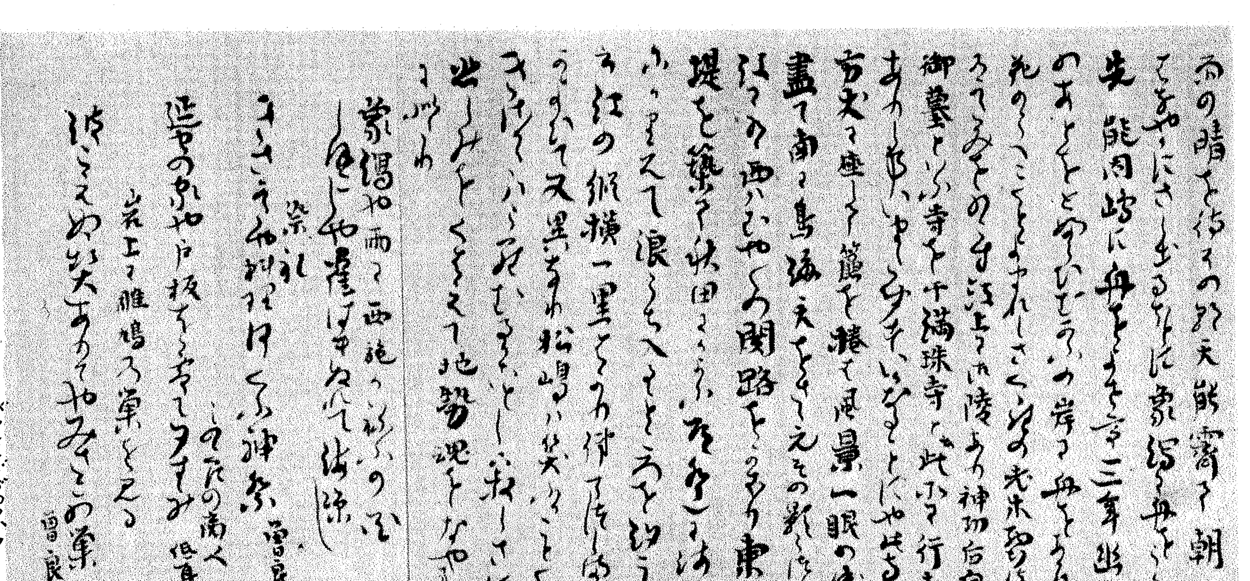
すゝしさやほの三か月の羽黒山
雲の峯いくつ崩て月の山
語れぬ湯とのにぬらす袂かな
ゆとの山銭ふむ道の泪かな　曽良

---

[2] もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし（金葉和歌集）

[1] 「呉越春秋」に読す名工の故事





酒田

羽黒を立て、鶴か岡の城下、長山氏重行と
云ものゝふの家にむかへられて、誹諧一巻有。
左吉もともに送りぬ。川舟にのりて酒田の

ミなとに下る。淵庵不玉（えんあんふぎょく）☆と云醫師（いし）のもとを宿（やど）とす。

あつミ山や吹浦かけて夕すゝみ

暑き日を海にいれたり最上河

☆伊東玄順
温海山
吹浦

江山水陸の風光数を盡して、今象潟に方寸（はうすん）を責（せむ）。酒田のみなとより東北の方（かた）、山を越、磯を伝ひ、いさこ（砂丘）をふミて、其際十里、日影やゝかたふく比、汐風真砂を吹上け、雨朦朧（もうろう）として鳥海（てうかい）の山かくる。闇中に莫作（もさく）して、雨も又奇（き）也とせは、雨後の晴色（せいしょく）又たのもしと、あまの苫屋に膝をいれて雨の晴（はるる）を待（まつ）。その朝、天能霽（はれ）て、朝日はなやかにさし出（いづ）るほとに、象潟（きさがた）に舟をうかふ。

☆象潟

先能因嶋（のういんじま）に舟をよせて、三年幽居のあとをとふらひ、[1]むかふの岸に舟をあかれは、「花のうへこく（漕ぐ）」[2]とよまれしさくらの老木、西行法師のかたみをのこす。江上（かうしやう）に御陵（みささぎ）あり。神功（じんぐう）后皇の御（み）墓といふ。寺を干満珠寺（かんまんじゅじ）と云。此所に行幸ありし事いまた聞（きか）す。いかなることにや。此寺の方丈に座して簾（すだれ）を捲（まけ）は、風景一眼の中に盡（つき）て、南に鳥海天をさゝえ、その影うつりて江（え）に有。西ハむやゝゝの関路（みち）をかきり、東に堤を築（きづき）て、秋田にかよふ道遥に、海北にかまえて、浪うち入るゝところを汐こしと云。江（え）の縦横一里はかり、俤まつしまにかよひて又異なり。松嶋ハ笑ふかことく、きさかたハうらむるかことし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢（ちせい）魂をなやますに似たり。

汐越

象潟や雨に西施（せいし）☆1（眠）かねふの花

しほこしや鶴はきぬれて海涼し

祭礼

きさかたや料理何くふ神祭　曽良

ミのゝくにの商人

蜑の家や戸板を敷て夕すゝみ　低耳

岩上に雎鳩☆2の巣を見る

☆3波こえぬ契ありてやみさこの巣　曽良

☆1「西施の顰（ひそみ）」中国故事
越王が呉王に贈った
世紀の美女西施の
憂い顔を皆が真
似たと云う

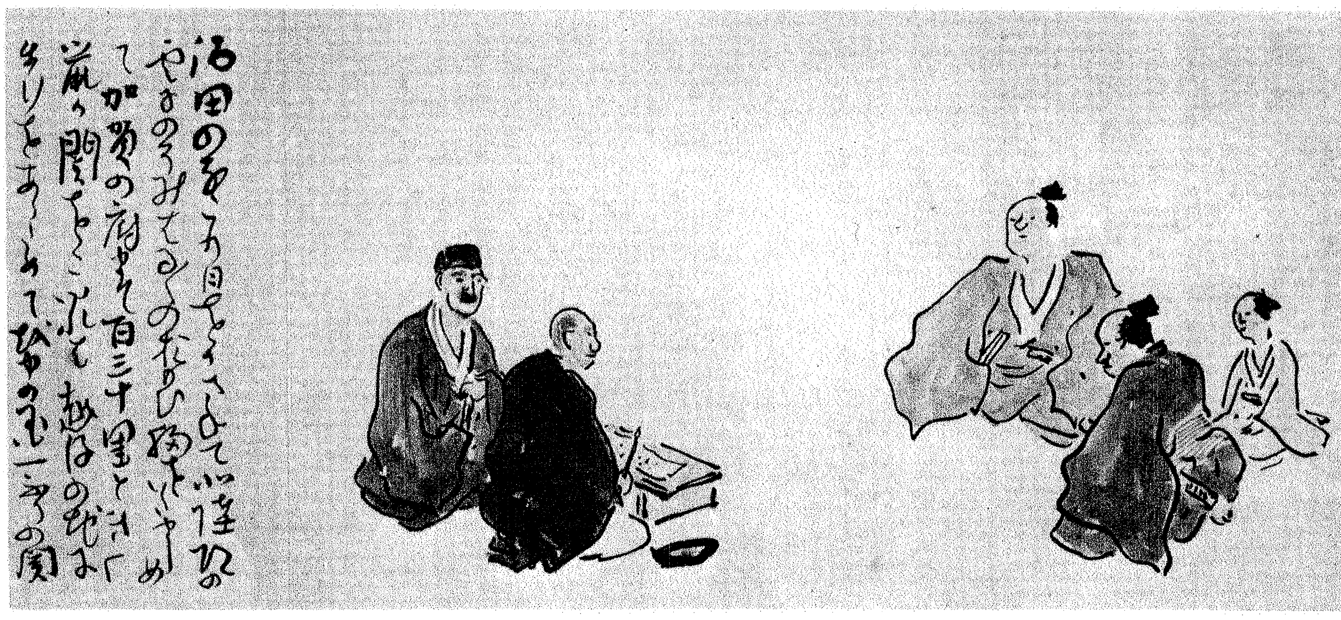
☆2詩経で「雎鳩（しょきゅう）」

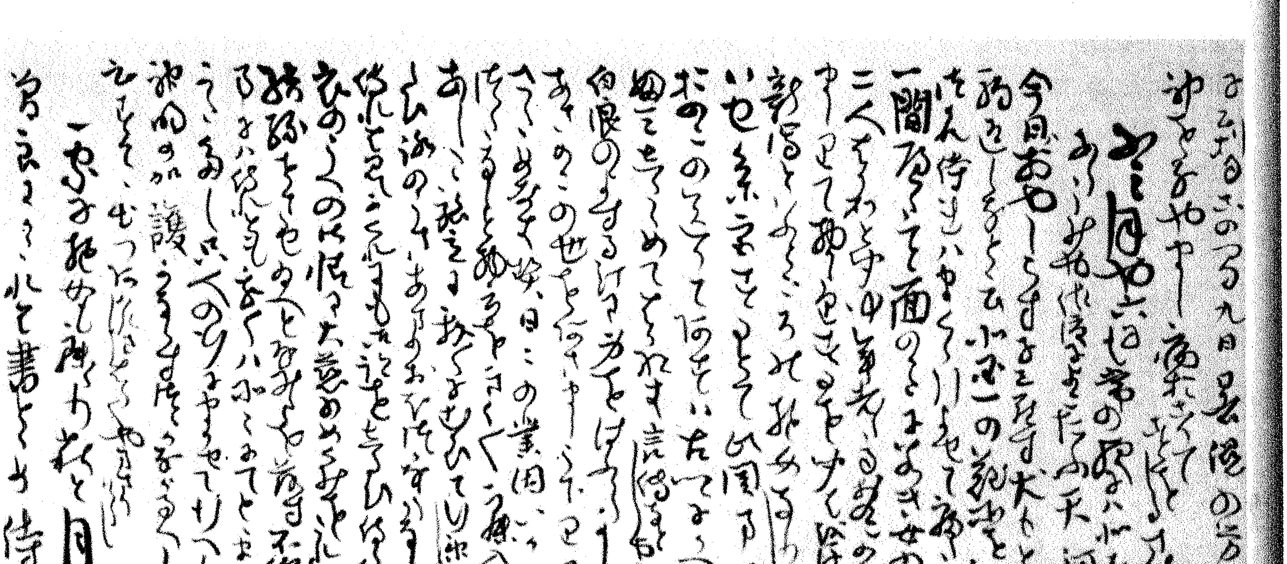
---

1) 世の中はかくても経けり象潟のあまのとま屋をわが宿にして（後拾遺集）

2) 象潟の桜は波に埋れて花の上こぐあまの釣舟（西行、家集未収録）

☆3 P39 3) 君を置きて仇し心を我が持たば
末の松山波も越えなむ（古今東歌）





酒田のなこり日をかさねて、北陸道の雲にのそみ、はるゝゝのおもひ胸をいたましめて、加賀の府まて百三十里ときく。